

武道人口の減少と同時に、職人人口の減少、すなわち技術力の衰退という問題に直面する武道具業界、中でも剣道防具業界においては、海外で生産された安価な防具が蔓延し、従来の流通構造をすら変貌させるまでに至り、近年では業界内においても懸念の声が広がっていることが明らかとなった。しかし、各小売店・企業も、手に持っていた技術力の保持と次代への教育・継承作業を放棄してしまい、昔ながらの職人の伝統技による武道具を主流にすることは、10年20年では叶わない。

このような状況下において、一般スポーツ用品業界の小売店同様、近年の少子化に悩まされるとともに、ネット販売の低価格競争に巻き込まれるなど、売り上げの低迷を嘆く武道具小売店は、技術力を自分の手に取り戻す必要性に気づくとともに、学校や道場などの「地域」との信頼関係を重視した営業を行うことで、業界復興の鍵となる経営基盤を築きうる可能性を秘めているのではないだろうか。

ライフヒストリー法を用いた地理学研究における地域叙述

—社会学のモノグラフ『都市の日本人』の考察より—

高野 萌

本研究では、ライフヒストリー法を用いた地理学研究に注目し、極めて個人的な情報を、プライバシー保護を考慮しつつ地理的理想力豊かな地域叙述へと昇華させるための工夫について、社会学のモノグラフ『都市の日本人』(R. P. ドーア)を分析し、検討した。

ライフヒストリー法とは、社会学の分野で生まれた、個人の経験から社会や文化の諸相を読み解こうとする調査手法であるが、近年地理学においても研究が蓄積されている。しかし、導入する場合、リアリティを追求して地域叙述を詳細にする程、調査対象のプライバシーを損なう危険性が高まるというジレンマが存在する。この問題に対して、文学作品や地図表現など多方面からの検討が期待されているが、本研究では、その一つとして社会学のモノグラフの分析による考察を行った。

『都市の日本人』は社会学研究に位置付けられるが、特定の近隣集団を調査対象としている点で地理学研究と共通する一方、地域叙述は類型化を目的に行われており、地域を特定する表現が避けられている。故にある種のライフヒストリー法を用いた地理学研究として捉え

る可能性を検討した。方法論は、地理学研究と社会学研究の境界面について論じているハーヴェイ(1980)とNystuen(1963)を採用した。『都市の日本人』における地域調査の中に、地理学調査としての側面を見出し、架空の名称であっても、実在する現象を記述等によって絶対・相対的参照すること／住居や道路、川などの物理的な要素の形態や配置がもたらす空間的効果に注目すること／方向や距離といった地理学的視点を含む概念を用いること、によって、地理学的想像力を喚起することが確認できた。

ライフヒストリー法は、特定の地域や場所を対象として研究を行ってきた地理学にとって、いかにプライバシー保護を考慮しながら研究を蓄積するかという重要な問題を提示している。今後も様々な視点からの考察が行われることで、こうした問題に一石が投じられていくことが期待される。

「外国につながる」子どもにとっての“Place” —東京都板橋区の多文化共生政策と学習支援活動における